

マルコによる福音書 4章 30節～41節

2015年6月25日

古本 靖久

1、聖歌 363番 「ガリラヤの風かおる丘で」

2、お祈り

3、聖書輪読（新約聖書 68 ページ）

4、テキストの位置

今回は、4章の始めから続いている「たとえ」の一つ、「からし種のたとえ」と呼ばれている箇所から始まります。

前回の種の成長と同様、小さくて取るに足りないようなものが、驚くほど大きくなるというイメージがこのたとえの中にはあります。

ガリラヤ宣教② (たとえ)	4:1-20	種と土地のたとえ
	4:21-23	ともし火はあらわにされる
	4:24-25	量られるわたしたち
	4:26-29	種の成長と神の国
	4:30-32	神の国はからし種
	4:33-34	イエスはたとえを用いる
ガリラヤ宣教② (奇跡)	4:35-41	自然を支配する
	5:1-20	悪霊を追い出す
	5:21-43	病人のいやしと死人の復活

イエス様はたとえを語られる時、当時の聞き手にとって、身近なものを題材とされてきました。道を歩いていて目に入ってきたありふれた植物を通して、神の国のことを語られるのです。

そして4章35節からは、奇跡をおこなうイエス様の姿が描かれます。突風を静め、悪霊を追い出し、病をいやし、ヤイロの娘を生き返らせていきます。しかしこれらの箇所でスポットが当てられるのは、イエス様のすごさだけではありません。それよりもイエス様の周りでイエス様と関わりを持つ人々が、話の中心になっていきます。

「まだ信じないのか」、「あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい」、「あなたの信仰があなたを救った」、「恐れることはない、ただ信じなさい」、イエス様がこれらの言葉を掛けるのは、2000年前の群衆や弟子たちに対してだけなのでしょう。わたしたちにはこれらの言葉がどのように響いてくるのでしょうか。ご一緒に見ていきましょう。

5、節ごとに

◆神の国はからし種

4:30 更に（また）、イエス（彼）は言われた。「神の国を何にたとえ（なぞらえ）ようか。どのようなたとえで示そう（表そう）か。

イエス様は様々な言葉を用いて、神の国のことを語ります。神の国とは神さまによる支配を指していますが、イエス様はガリラヤで伝道を始められるときに、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1：15）と言われました。「イエス様、神の国とはいったい何ですか」、そのように人々からいつも問われていたのかもしれませんが。

4:31 それは、（一粒の）からし種のようなものである。土（地）に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、

イエス様は神の国をからし種にたとえられます。パレスチナ地方では、からし種は小さいものの比喩としてよく用いられていたようです。実物を見たことのある方もおられると思いますが、右下の写真のように、大変小さい物です。

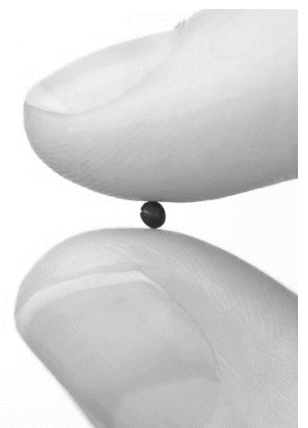
4:32 （しかし）蒔く（かれる）と、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の（その）陰に空の鳥が巣を作れる（宿ることができる）ほど大きな枝を張る。」

小さなからし種が驚くほど大きくなる、それが神の国のイメージです。しかし「どんな野菜よりも」と書いてあるように、巨木になるわけではありません。（マタイ・ルカでは「木になる」とありますが）。

からしの木は成長しても 2.5m～3m にしかならない灌木（低木）です。旧約聖書では、神の国を巨大な木と考え、すべての国民はその下に憩うというイメージがあります。しかしからし種は、並外れて巨大な印象はまったく与えません。それどころか、とても親近感にあふれます。

木の葉が手の届くところにあり、日影がちょうどよく自分を包み込む。パレスチナ地方でそのような木を見つけたら、すぐ駆け寄っていくことでしょう。それが神の国なのです。

そして「空の鳥」という言葉がありますが、これは「異邦人」という意味で使われる言葉です。イエス様が伝えられる神の国は、世界中すべての人を憩わせるものです。決して排他的な、選ばれた人たちだけに与えられるものではないのです。



◆イエスはたとえを用いる

4:33 (そして) イエス (彼) は、人々の聞く力に応じて (が聞くことのできるやり方で)、このように (な) 多くのたとえで御言葉を語られた。

たとえとは人々の理解を助けるために用いられているのでしょうか。それとも隠された部分をかえって分かりにくくするために、使われているのでしょうか。4章12節には後者だという説明がありました。

わたしたちにも聖書を通して様々なみ言葉が語られています。それらの言葉をわたしたちは、どのように聞いているのでしょうか。

「人々の聞く力に応じて」と聖書にはあります。ここを丁寧に訳すと、「人々が聞くことのできるやり方」となります。つまり、イエス様は相手に分かるように話した、という意味なのです。

聖書を読むときに、心の状態やその時の状況によって、響いてくるメッセージが違うことはありませんか。それは聖書が、わたしたちが聖書を読んでいるその時にに応じて、理解できるように語りかけているからなのかもしれません。

4:34 たとえを用いず (なし) に (彼らに) 語ることはなかったが、(自分たちだけになると) 御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明 (説き明か) された。

ここを新共同訳聖書に書いてある通りに読んでしまうと、何だか秘密主義のように思われます。しかし「ひそかに」という言葉は原文にはありません。単に、ちょっとした折を見つけては、弟子たちにいろいろなことを語っていた、それくらいの意味です。

イエス様は、ご自分の母や兄弟たちが来たときに、周りに座っている大勢の人を見まわして言われました。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」と。

イエス様は「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われます。わたしたちはイエス様の弟子たちのように、み言葉を聞く者でありたいと思います。毎日の生活の中で、折に触れてみ言葉に聞く。イエス様と共に在り、じっと座してイエス様の言葉に聞く。それがわたしたちが求められていることなのです。



◆自然を支配する

4:35 (そして) その日の夕方になって (なると)、イエス (彼) は、「向こう岸に渡ろう」と弟子たち (彼ら) に言われた (う)。

「その日」というのは、種を蒔く人のたとえを語られた日でしょうか。夕方にイエス様は「向こう岸に渡ろう」と弟子たちを促します。弟子たちが危険を顧みずに決断したわけではありません。イエス様が決めたのです。

イエス様に守られているのなら、危険な目に遭うことはない、そうわたしたちは思います。また「わたしたちを試みにあわせず」と主の祈りでも祈ります。しかしイエス様は、弟子たちを向こう岸に行かせようとするのです。それは何故なのでしょう。



4:36 そこで、弟子たち (彼ら) は群衆を後に残し、イエス (彼) を舟に乗せたまま漕ぎ (連れ) 出した。ほかの舟 [複数形] も一緒であった。

弟子たちは言われるままに、舟を漕ぎ出しました。他にも何艘か、舟があったようです。しかしここ以外に、他の舟の記述はありません。もともとは他の舟についても、いろいろな話が伝えられていたのかもしれませんが、想像力を膨らませて、物語を作りたくなります。

さて、イエス様は会堂で教え、いやしをおこなわれました。そして今、舟の上で教え、奇跡をおこそうとされています。会堂と舟が、イエス様の活動の場となっているのです。

教会においてもかなり昔から、会堂と舟は結び付けられてきました。桃山基督教会の天井の作り方を見ても、そのことがわかります。

4:37 (そして) 激しい突風が起こり、(そして波が) 舟 (の中に) は波をかぶって (入ってきて)、水浸し (舟一杯) になるほどであった。

そして、舟を激しい風が襲います。ガリラヤ湖はすり鉢のようになっており、今でもこのような突風は珍しくないそうです。しかし、漁師出身の弟子さえも慌てふためくほどの激しい突風だったのでしょう。水は舟一杯に入ってきて来ます。

4:38 しかし、イエス（彼自身）は艫の方で枕をして眠っておられた。（そして）弟子たち（彼ら）はイエス（彼）を起こして、「先生、わたしたちがおぼれても（滅んでも）かまわないのですか」と言った（う）。

普通このような物語では、イエス様に対して嘆願をします。マタイとルカの同じ場面を見てみると、「先生、先生、おぼれそうです」（ルカ 8:24）、「主よ、助けてください。おぼれそうです」（マタイ 8:25）というように、イエス様に願う弟子の姿が描かれています。



しかしマルコのこの箇所を読む限り、弟子たちはイエス様を非難しているように聞こえます。弟子たちはイエス様が風や波を叱ることのできる方だとは思えなかったのでしょうか。イエス様は教え、病気の人をいやし、悪霊を追い出すことはできたとしても、それだけの人間だと考えていたのでしょうか。

しかしこの気持ちは、わたしたちの中にもあるのかもしれませんが。イエス様は神の子であり、わたしたちの必要をすべて満たしてくださる。そう信じていたことが、不安なことがあるとあつという間に消えてしまう。その姿と弟子たちとが重なって見えます。

4:39 （そして）イエス（彼）は起き上がって、風を叱り、湖（海）に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すつかり（大きな）凧になった。

ところがイエス様は、ご自分を非難する弟子たちを助けます。古代のオリエントにとって、風と息と霊とは同じように考えられていました。つまり空気の動きはすべて、目に見えない霊の動きであると思われていました。したがって、悪霊を叱りつけることと風を叱りつけることとは何ら変わりのないことだったのです。

4:40 （そして）イエス（彼）は（彼らに）言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じ（信仰を持た）ないのか。」

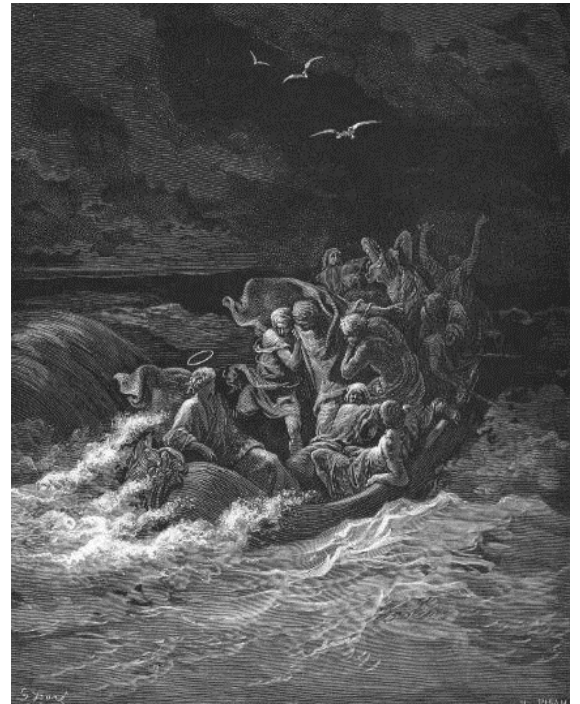
ここでイエス様は信仰に対する問いを投げかけます。この 4 章後半から 5 章にかけて、何度も信仰が問われていきます。しかしイエス様は、信じることの出来ない者たちを救われていることにも気づかされます。イエス様のメッセージ、それは「早く信仰を持つ者になりなさい」という呼びかけなのです。

4:41 (そして) 弟子たち(彼ら)は非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や潮(海)さえも従う(言うことを聞く)ではないか」と互いに言った。

弟子たちは恐れます。しかしこの恐れは、「畏れ」と書いた方が良くもありません。ただ怖いという気持ちを持つだけではなく、敬い、かしこまる気持ちがそこにはあらわれています。

神さまの力が、自分たちの元に近づいてきたのです。イエス様が共に舟に乗ってくださったこと、それは他でもない、神さまがいつも共にいて下さることのしるしだったので。そのことに弟子たちは身震いしました。

この物語は、初代教会の中でも大切にされてきたことでしょう。不安や恐れの中に教会が巻き込まれた時に、彼らはこの物語を語りながら言ったのではないのでしょうか。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」と。



<今日の箇所から>

わたしたちは苦しみや悲しみ、困難な状況に陥ったときに、神さまの存在を疑ってしまうことはないでしょうか。神さまは今、きっと自分の方を向いてくれている、そう考えながら、必死で神さまを起こそうとすることもしばしばです。それも文句を言うために。

わたしたちは強い信仰を持ちたいと願います。嵐が来ても、風が吹いても、びくともしない。そのような者になりたいと思うのです。しかしそうなれない自分に気づいてしまう。

弟子たちはイエス様の前で、弱さを見せました。嵐の前であたふたし、イエス様に文句を言う姿、この姿を見ると、ホッとするのはわたしだけでしょうか。そしてその弟子たちの姿にもかかわらず、救いの奇跡をおこされるイエス様の姿に希望を見いだすのは、おかしいことでしょうか。

わたしたちには小さな信仰が植えられています。そしてその信仰は、わたしたちを包む神の国へと成長していくのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は7月23日(木)10時30分からです。「悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす」(マルコ5:1~20)について学んでいきます。